

『7つの習慣：成功には原則があった!』

Stephen R. Covey 著、James J. Skinner、川西茂訳／キング・ペアー出版

これまでの研究教育生活を振り返ると素晴らしい人たちに出会ったことを思い出す。高度な講義内容をよく勉強し理解してくれた人たち、そして研究で素晴らしい能力を発揮してくれた人たち、これらの人たちにお別れの時にはいつも、新しい人生で夢を実現するために役立つ重要なことを話しておきたいと思う。その第一は学生の頃に新聞の投書欄で見つけた話だ。

「私」は実に平凡な中学生か高校生。クラスメートの中に国体に出た一流の水泳選手がおり、彼がいつもクラスでちやほやされることに反感を持っていた。ある日「私」はその日のホームワークに必要な資料を教室に置き忘れてきたことに気がつき、夜なのにどうしても学校に戻る必要が出てきた。学校の門の近くまで来ると、真っ暗な構内で屋内プールだけに明かりがついている。はてなと思って中を覗いてみると、そこではクラスメートのあの水泳選手がただ一人、黙々と水泳の練習をしていた。それを見た時「私」には「一流である」ということがどのような事なのか、誰にも解説されることなく一瞬にして理解できた。

我々が自分の人生における夢を実現しようという時、是非知っておくべきいくつかの重要事項がある。これらの事項は特別な時には他人に説明されなくても理解できるのかもしれない。しかし入学、研究室への配属、就職などの転機には、夢の実現のために新しい計画を立てておきたい。この計画のためにはこれら重要事項の理解が必要不可欠となる。

書店に行くとたくさんの啓蒙書が積まれている。これらを通読してみるといくつかの事項はどの啓蒙書にも共通して紹介されていることに気づくかもしれない。これらの重要事項にはルーツがあるのだ。啓蒙書の多くの著者は後述するような、いくつかの既にスタンダードとなっている啓蒙書の古典から着想を得ている。

ここに紹介する『7つの習慣』はそれらの古典的な啓蒙書の一つであり、とても内容の深い本だ。一読するだけではすべての内容を把握するのは困難だが、な

んらかの節目ごとに再読していけば、この本はあなたの人生をととても豊かにしてくれるだろう。

『7つの習慣』におけるすべての指摘は含蓄が深いが、ここでは我々日本人が特に知っておくべき事項をひとつだけ紹介したい。それはwin-winの精神である。これは読んですぐ意味のわかる言葉であり、既にいろいろな所で使われている。しかし著者は、ほとんどの人がこの言葉の本当の意味を理解していないという。この意味を知るためには本書を熟読する必要があるが、それはさておいて以下のようなことを考えてみよう。

我々にとって富士山が「世界遺産」に登録されたのは嬉しいニュースだ。しかしこれが「世界自然遺産」ではなく「世界文化遺産」なのに何人の人が気づいているだろうか。これには理由がある。富士近郊は開発が進みすぎて自然が破壊されているからだ。我が国が素晴らしい国であるのは間違いないが、政府やマスコミがいうように「美しい国」だと感じるためには、残念な事に「愛国心のめがね」を通して景観を見る必要があるのかもしれない。

たとえば三島市内をドライブしていると突然視界が開けて雄大で美しい富士山がぬっと姿を現わす事がある。その美しさにはとても感激するのだが、それに続いて現れるのは黄色や赤のどぎつい色彩の看板だ。富士を見ればどうしても眼に入るようにわざと目立つ色彩でしかも高い位置に掲げられている。これらの醜悪な看板は日本の都市ではありふれた風景だから、ほとんどの人は違和感を感じないのだろう。しかし外国の街と比べると、どうしてもその醜悪さと広告主のエゴを感じてしまう。

このような派手な広告類は外国の多くの都市では景観の保護の目的で規制されている。バーハーバーでは看板自体が芸術的で、街並みととても美しく調和している。コペンハーゲンではマクドナルドやケンタッキーフライドチキンもゴシッ

ク様式のビルの一部として同化している。またタオスやサンタフェではプエブロ・インディアン伝統の土作りの家がマクドナルドの店舗となっていたりする。街全体の調和のとれた美しさは、この街にいつかまた来てみたいという気持ちを強くさせる。

派手な看板を掲げて周辺での競争に勝っても、その利益は一時的なものでしかない。大企業であっても、金もうけしか考えない会社はそのうちに没落への道を歩むことになる。日本では大学受験で人生の多くが決まるから、競争が大事だと考えている人が多い。しかし私自身とても驚いたのだが、世界的にベストセラーとなったビジネス書の多くには「社会への奉仕」が企業の成功の要因としてあげられている。

ここで紹介しているスティーヴン・コヴィー『7つの習慣』に加えて、ピーター・ドラッカー『マネジメント』、『経営者の条件』、ナポレオン・ヒル『思考は現実化する』、本田 健『ユダヤ人大富豪の教え』など。一見して金儲けの仕方を教えているように思えるこれらの本の根底を流れているのは、意外にも「企業の存在意義は社会への奉仕にある」という思想である。

我々はすべてを点数で評価される環境にいるが、ドラッカーは「私は社内評価制度が本当に機能している会社を見たことがない」と言う（『経営者の条件』）。競争が大事なのも確かだが、人生における夢の実現のために、我々の目はもっと大局を見すえていなければならないのではないだろうか。

例えばあなたがある駅前商店街に店を構えるオーナーだと考えてみよう。価格やサービス面で近くの商店と競争するが、なかなか売上げが伸びない。近隣の店舗も閉店するところが目立ってきて、街はシャッター商店街となりつつある。事態を打開するにはどうすればよいか？

そこで商店街全体で解決策を話し合った。その結果、もともと少ない客を各店が奪い合っていた現実が指摘され、まず商店街自体を魅力的にする取り組みが提

案された。花を植えて美観を整え、お客さんが足を運びやすい環境を整えた。商店街全体の行事を魅力的なものとし、またすべての店のサービスを充実させた。その結果、郊外の大規模なモールに移っていた客足が次第に商店街に戻ってきた。

日本でも研究に大規模な予算が投じられることになって久しく、今や中小規模の大学は大規模な大学に太刀打ちすることが困難な状況だ。私たちの大学も内部で競争するのではなく、win-winの精神を持って大学全体をより魅力的にしていくシステムを作っていく必要がある。本学に入学しそして巣立っていく人たちも、自分の人生における夢を実現するためにはこの精神を学んでおく必要があると思う。

『7つの習慣』は高度に成功した人たちが持つ習慣を集大成して解説したものだ。ここに挙げたwin-winの精神を含めて多くの含蓄のある考えを、多くの具体的な例を用いて平易に解説している。これらの重要事項（習慣）が、達成すべき順序に並べられているのも大きな特徴である。研究にその分野の知識の理解が必要であるのと同じように、夢の実現にも重要事項の理解が必須となる。人生の転機に本書を是非熟読して、自らの夢の実現の一助としてほしい。

執筆者紹介

三木 徹

生物機能工学専攻教授（平成27年3月退職）。専門領域は、分子細胞生物学。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『7つの習慣：成功には原則があった！』 Stephen R. Covey著 James J. Skinner, 川西茂訳 キング・ベアー出版 1996年 2,097円

『マネジメント：課題・責任・実践 [全3巻]』 P. F. Drucker著 上田惇生訳 ダイアモンド社（ドラッカー名著集13-15）2008年 各2,592円

『経営者の条件』 P. F. Drucker著 上田惇生訳 ダイアモンド社（ドラッカー名著集1）2006年 1,944円

『思考は現実化する』 Napoleon Hill著 田中孝顕訳 きこ書房 1999年 2,376円

『ユダヤ人大富豪の教え』 本田健著 大和書房 2003年 1,512円

[ブックガイド目次へ](#)